

七代教授

谷奥喜平 教授

昭和35年(1960)―昭和51年(1976)



昭和35年岡山大学の**皮膚科・泌尿器科学教室から皮膚科学教室が分離独立**することとなった時、初代教授として谷奥喜平教授が信州大学から岡山へ赴任された。「岡山大学の皮膚科教室は他の大学の夫れと異なり、皮膚科が分離独立したもので、この意味で我国唯一の教室である」と谷奥教授が述べている。教室新設当時、日本の皮膚科学の主流は記載皮膚科学であり、実験皮膚科学は日本においてはまだ揺籃期であり、新しい波であった。谷奥教授はその旗手として新しい皮膚科学の旗を担いで岡山に着任された。当初より、谷奥教授は、皮膚病の「場」の病態の解明に意をそそがれ、生化学的な方面からと免疫学的方面の両面から研究を進めることを強調された。臨床的方面では、皮膚変化の裏にあるものを見極めること――内臓病変の皮膚表現に注目すること、直感ではなく考えながら患者をみることを教室員に教えられた。さらに、臨床の3つの柱として、臨床アレルギー、化学療法、形成外科を挙げられ、各人研究テーマの他に、臨床のグループのいずれかに属することを義務づけられた。

谷奥教授の当初の研究テーマが化学療法、薬疹、接触皮膚炎であったこともあり、教室としては薬剤の皮膚内代謝、接触アレルギーの発生機序、ビタミン、性ステロイドホルモンの代謝などを手掛けられた。

教室の基盤が固まるにつれて、日本皮膚科学会、日本化学療法学会、日本アレルギー学会、日本結合組織学会、日本癩学会などの研究領域の主な学会を主宰された。注目すべきは**皮膚科研究同好会を結成されたことで、これが今日の日本研究皮膚科学会に発展**し、若手研究者の活躍の場となります。

教室の人員が充実して来るとともに、周辺の病院にも皮膚科新設の気運がたかまり、あちこちから人をよこせの要望が来始めたのは当然の流れで、岡山済生会病院、国立岡山病院、川崎病院、香川県立中央病院、岡山市民病院、高知県立中央病院、栗林病院、岡山赤十字病院、住友別子病院、姫路赤十字病院、金光病院、丸ノ内病院、高松赤十字病院、国立福山病院と皮膚科が開設され、教室の関連病院も確立して行った。

国際的にも交流が行なわれ、米国へ野原(S41-42)、吉田(S46-48)、高岩(S48-50)、萩山(S50-)、独逸へ植木(S46-48)、英国へ中川(S48-49)、仏国へ荒田(S46-48)らが留学した。

谷奥教授は終始一貫して、学問への情熱をもち続けられ、常に前向きに「自分の夢」を持ち続けられた。夢みて行なうことをいつも教室員に厳しく要求された。

(荒田次郎. 谷奥時代の15年――思いつくままに――. 谷奥喜平教授退官記念岡山大学皮膚科学教室業績目録・退官記念誌より引用、改変)

写真は同門 三浦国輝先生のご厚意による